

(2) 苗づくり

苗づくりのねらい

イネは、たねもみを直接本田にまくこともあるが、わが国では育苗箱や苗しろなどで苗をつくってから、本田に移植することが多い。その理由は、①ハウスなどを利用して、はやくから苗づくりができるので、田植えもはやくできる、②鳥害や気象災害などが防止しやすく、いきとどいた管理ができるので、そろった丈夫な苗ができる、③よい苗を選んで、本田へ植え付けることができる、などイネの生育に好ましい条件をつくり出すことができるからである。

苗の種類

イネの苗は、ふつう、葉齢^①によって、稚苗^{ちびょう}、中苗^{ちゅうびょう}、成苗^{せいびょう}の3つに区別される(図9)。これらは、おもに機械植え用の苗として育苗箱でつくられることが多いが、成苗は苗しろで育てられることもある^②。以下、育苗箱での苗づくりについて述べる。

育苗箱と床土

専用の育苗箱と床土を用意する。本田1aの植付けに必要な育苗箱の数は2枚前後である。床土はpH(ピーエッチ)を5に調整し、肥料は成分量で窒素、リン酸、カリとも1箱当たり1~2g用いる。販売されてい

①主稈から出ている葉の枚数によって成長のていどをあらわしたものの。なお、「主稈葉数」(→p.70「研究」という場合は、最終的に主稈につく葉の枚数(ふつう14~17枚)をさし、早生品種に比べて晩生品種が多い。

②中苗や成苗は手植え用としても利用されている。

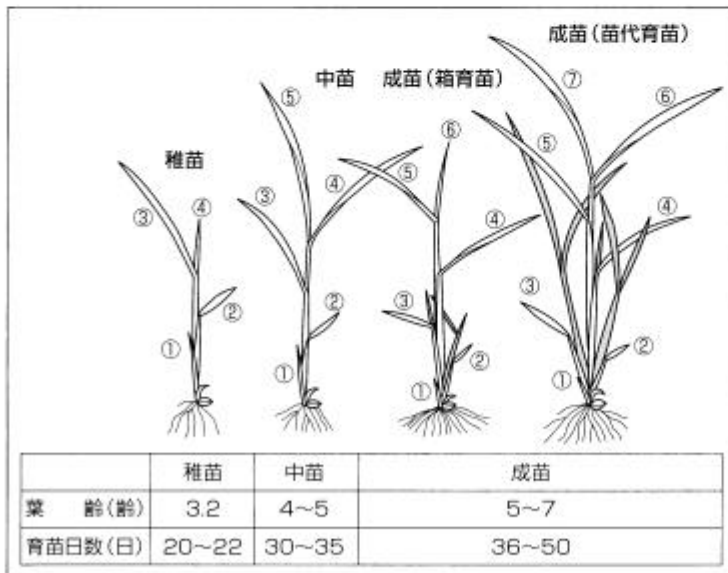


図9 苗の種類

注 図中の数字は第何葉であるか、黒っぽい葉は分けつを示す。育苗日数は、たねまきから植付けまでの日数である。

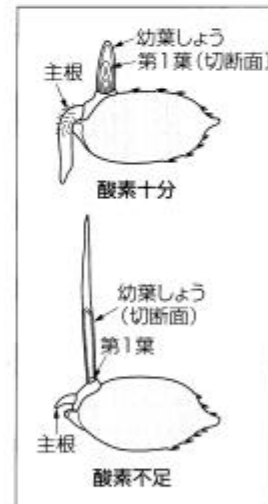


図8 酸素の多少と発芽状態

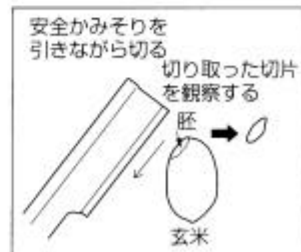


図7 胚の観察の仕方